

タイトル	テレジエンシュタットへのスロバキアからの強制移送 - 前史 -カタリーナ・フラツカ
著者	木村, 和範; KIMURA, Kazunori
引用	季刊北海学園大学経済論集, 71(1): 57-69
発行日	2023-06-30

《翻訳》

テレジエンシュタットへの スロバキアからの強制移送 — 前史 —*

カタリーナ・フラツカ**

木村和範*** (訳)

ポーランド領土内にある強制収容所と絶滅収容所へのスロバキア・ユダヤ人の第一波強制移送があったのは、1942年3月から10月にかけてである。このときはフリンカ・スロバキア人民党のファシスト分子とフリンカ警固団 (Hlinka-Garde) が極端な行動に出たこともあって、内務省の公式記録によれば、スロバキア政府の了解の下でユダヤ教の信徒5万7752人が強制移送された⁽¹⁾。最重要の情

報源である完全な移送名簿がないため、犠牲者の正確な統計を得ることは基本的に不可能である。しかし、様々な資料を見比べれば、上述の数字に近い比較的信頼できる結果を得ることができる。恐怖の強制収容所から生還できたのは、二、三百人であった。内務省第14局が作成した「ダヴィデ作戦」^[訳注1]の経過報告書には、57本の移送列車がスロバキアの国境を越えたと記されている。そのうち38本の強制移送列車で3万9006人が〔ポーランド総督府の〕ルブリン県に行き、19本の列車で1万8746人がアウシュヴィッツに

* „Vorgeschichte der slowakischen Transporte nach Theresienstadt“, *Theresienstädter Studien und Dokumente*, 1996, SS. 82–97. 翻訳出版は執筆者の許諾に基づく。(補注)は訳者の照会への原著者のコメント。訳文中の〔 〕内は訳者による。

** Dr. Katarína Hradská, The Institute of History, The Slovak Academy of Sciences.

*** 本学名誉教授

(1) „Der Bericht über die ‚Aktion David‘“, in: *Národný archív Slovenskej republiky* (Das Nationale Archiv der Slowakischen Republik - weiter zitiert als NA SR), Bestand Národný súd (Nationalgericht), Tn ľud, 17/46, Anton Vašek, Mikrofilm 1011. Vgl. ferner: Ladislav Lipscher, *Die Juden im Slowakischen Staate 1939–1945*, München 1980. Slowakische Version: *ditto*, *Židia v slovenskom štáte 1939–1945*, Bratislava 1992; Ivan Kamenec, *Po stopách tragédie*, (Auf den Spuren der Tragödie,) Bratislava 1991; I. Kamenec, „Snem Slovenskej republiky a jeho postoj k problému židovského obyvateľstva na Slovensku v rokoch 1939–1945“, („Das Parlament der Slowakischen Republik und seine Einstellung zu den Problemen der

jüdischen Bevölkerung in der Slowakei in den Jahren 1939–1945“, in: *Historický časopis*, Bratislava 1969, XVII, Nr. 3, S. 329–360; Gila Fatranová, „K deportáciám slovenských židov v roku 1942“, („Zu den Deportationen der slowakischen Juden im Jahre 1942“, in: *Slovenski židia*, Banská Bystrica 1991; Raul Hilberg, *Die Vernichtung der europäischen Juden*, Band 2, Frankfurt 1990, S. 785. (望田幸男, 原田一美, 井上茂子訳『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』(全2巻) 柏書房, 1997年。)

この場をお借りしてユダヤ人博物館 (プラハ) のアニタ・フランコヴァ氏 (Anita Franková) にお礼申し上げます。

[訳注1] スロバキア・ユダヤ人の強制移送作戦。Vgl. Wolf Oschlies, „Aktion David — Vor 65 Jahren wurden aus der Slowakei 60.000 Juden deportiert“, 12. April 2007, *Zukunft braucht Erinnerung*: <https://www.zukunft-braucht-erinnerung.de/aktion-david-vor-65-jahren-wurden-aus-der-slowakei-60000-juden-deportiert/>, accessed on March 29, 2023.

向かった⁽²⁾。1942年秋、ユダヤ人の強制移送は取りやめになった。ユダヤ人が収容所に行くのは、プロパガンダが喧伝するような労働のためではなく、死ぬ(ガス室に入れられる)ために行くという噂が、すでに一般大衆の間で囁かれていたからであった。そのようなことがあったものの、スロバキア共和国の領土からユダヤ人をさらに強制移送するための準備は、1943年以降になっても止むことがなかった。その準備の条件は以前とは異なっていたが、政府や省庁(内務省や同省第14局)の命令から分かることは、依然としてスロバキアに残っているユダヤ人を強制移送しようという考えがまだ生きているということであった。ユダヤ人問題を跡形もなく解決すべきだという声は、ますます大きくなった。何と言ってもスロバキア共和国には、心底からいて欲しくないと思うユダヤ人がまだ2万人も居住していたからである。公式統計

によれば、1943年3月1日現在、スロバキア共和国の領土にいたユダヤ人総数は1万8945人である⁽³⁾[表1]。しかし、そのほとんどは宗教上の理由とか、省庁や大統領府による様々な免除によって保護された人たちである。その他に、外国人を装って不法滞在していたユダヤ人が多数いた。

経済的・社会的に重い地位にいるユダヤ人を1942年中に完全に排除することは、まだできてはいなかったが、ユダヤ人の影響力が1942年の初めほどには強い分野はもうなくなっていた。それでも郡^[訳注2]では、残っているユダヤ人にこれ以上労働許可証を発行すべきではない、すでに発行済みの許可証は返納させるべきだという声が出ていた。国家政党たるフリンカ・スロバキア人民党とフリンカ警固団によって大規模調査が組織され、ユダヤ人が経済の専門家として役に立つかどうか、またどの分野で役に立つのかをはっきり

表1 スロバキア・ユダヤ人(1943年3月1日現在)⁽⁴⁾ (人)

男 9 632	女 9 313	合計 18 945
収容センター/収容所		
男 1 404	女 1 170	合計 2 574
宗派		
ユダヤ教	10 570	
洗礼済み	8 002	
洗礼済み内訳		1939年3月14日以前
ローマ・カトリック	2 812	1 342
福音派	2 926	389
カルヴァン派	1 098	268
ギリシア・カトリック	886	360
東方正教会	186	142
その他	94	69

(2) NA SR, Bestand Národný súd, Tn ľud, 17/46, Anton Vašek, Mikrofilm 1011.

(3) もちろん、この見解については議論の余地がある。イヴァン・カメネツはその人数を2万4000人とし、これに対してラディスラフ・リブシエルは1万8648人としている。注1に引用し

た著作を参照のこと。

[訳注2] ナチスの時代の郡(Kreise)はGau(大管区)の下の行政単位。

(4) NA SR, Národný súd, Tn ľud, 17/46, Anton Vašek, Mikrofilm 1011.

させることになった。調査の結果に驚いた者は誰もいなかった。答えは決まり切っていたからである。ユダヤ人は社会生活にはまったく役に立たず、簡単にその代りが見つかる、スロバキアのコミュニティでユダヤ人を必要とする所はどこにもない、という予想どおりの結果であった⁽⁵⁾。

1943年春になると、強制移送の再開が緊迫し、現実味を帯びてきた。内務大臣兼フリンカ警固団総司令官アレクサンデル・マッハ(Alexsander Mach)が、「ユダヤ人問題の最終解決」を請け負ったからである。1943年2月、ルゾムベロク(ローゼンベルク) [パンスカ・ピストリツァ^フの北約53^{キロ}] で開かれたフリンカ警固団の大管区会議の演説で、アレクサンデル・マッハが、受洗の有無にかかわらず、残っているユダヤ人は運命から逃れられないとして次のように言い切った。

80%のユダヤ人を排除した今、我々の当面の任務は残りのユダヤ人を根こそぎにすることである。……3月が過ぎ、4月になれば、強制移送はまた始まる。⁽⁶⁾

強制移送の組織化を統括する内務省第14局長アントン・ヴァシェック(Anton Vašek)は、すでに強制移送されたユダヤ人の人数を統計で示し、マッハの演説を補足した。ヴァシェックの話聞いた聴衆は激しくマッハを野次り、数字はどうでもいい、もっと移送しろと声を張り上げた。「大統領が[強制移送の]除外措置の対象とした者もひっくるめて、ユダヤ人は全部移送せよ。」というのが、彼

らのスローガンであった。

その間、所管する政府関係者によって、新規の移送列車を編成する準備がすっかり整った。1943年3月、内務省第14局は、一つひとつ手順を踏んで実行するというユダヤ人問題の解決案を提示した。手始めに、1本に1000人ずつを乗せた移送列車を4本編成し、それで1943年4月18日~22日にスロバキアの領土から強制移送する手はずが整った⁽⁷⁾。政府はこの内務省案を採用した。内務官僚のどのような有力者がこの提案の背後にいたかは不明である。また、誰がこの計画のことをスロバキア共和国大統領ヨゼフ・ティソ(Josef Tiso)に知らせたのかも不明であるが、アントン・ヴァシェックと内相のマッハが怪しい。おそらくマッハであろう。彼は「ユダヤ人問題の最終解決」のときに登場し、[たとえば、次のように]いくつかの提案をしているからである。

この上今すぐにもスロバキアの国境を越えてユダヤ人を追放することには、経済界の有力者が反対を明言している。そのことは、私も知っているし、実際にそのとおりである。他方、政界はと言えば、妥協することなくユダヤ人問題の即時最終解決を主張している。私は、この複雑な問題全体をくまなく検討した結果、遅くとも戦争中に双方は歩み寄ることができるであろうという結論に達した。経済の問題について言うと、国全体で労働力は事実上逼迫^{ひっぼく}している。ほとんど壊滅的な状態にあるこの労働力不足の問題にいつそう拍車を掛けたのは、増加傾向にある[東方の]開拓で進められたユダヤ人の再定住のせいであろう。政治的利益と経済的利益の間にあるのは、時間的矛盾だけである。要するに、問題はこれを

(5) *Riesenie židovskej otázky na Slovensku (1939–1945)*, (Die Lösung der Judenfrage in der Slowakei (1939–1945).) Dokumente, III. Teil, Bratislava: SNM, 1995, S. 39.

(6) *Gardista*, 9. Februar 1943.

(7) *Riešenie*, III, S. 21.

解決すればよい。したがって、私は、憲法の枠内でユダヤ人を労働収容所やユダヤ人センターに完全に隔離し〔労働に従事させて〕、ユダヤ人を再定住させるための前段階の準備をしておくことを提案するのである⁽⁸⁾。

翌月(1943年4月8日)には、スロバキア政府も会議を開催し、ユダヤ人問題を審議して今後のガイドラインが定まった。各省庁は、発行した免除証明書を審査し、「重要ではないユダヤ人」には直ちに返納させることになった。こうして、本当に必要とされるユダヤ人だけが、今後も仕事に就いて良いことになった。

洗礼を受けておらず経済界から排除されたユダヤ人は強制移送され、洗礼を受けたユダヤ人は労働収容所に強制収容するものとされた。偽造書類(大統領による移送除外措置適用証明書、洗礼証明書などの偽造文書)を携行する者は、経済的に重要な人物か否かにかかわらず、スロバキアから強制移送されるものとされた⁽⁹⁾。公文書館には、審査で数多くの偽造文書が発見されたことを示す報告文書がある。たとえば、ユダヤ人はスロバキアの国事に政治的打撃を与えかねないとか、不必要なユダヤ人が一定のポストにまだ居座っているという苦情も、所轄官庁に寄せられた。いなくては困ることを証明する証明書を持っている者もいたが、多くの者が持っていたのは偽造書類であった。このためアントン・ヴァシェックは、1943年4月14日、プリンカ警固隊総司令官マッハ宛の書簡で、経済的には重要だが政治的には好ましくない人物の正確な名簿を、遅くとも2週間以内に作成す

るよう申し入れた。主として共産党員を問題にしたのである。

このころ、1939年3月14日以前に洗礼を受けたユダヤ人の名簿が各地区から本部事務局と警察局に上げられてきた。各部署の協力の下で、スロバキアの1925年法律第96号第6条に定める意味でのユダヤ教を棄教したことを示す証明書の保有者名簿に掲載されたユダヤ人を追放してよいかどうか審査されることになった。効力を発揮したのはこの棄教証明書だけであって、それがあれば追放から我が身を守ることができた。〔棄教証明書を提出させて〕すべてのユダヤ人市民の名簿を作成する意図は明白であった。その総数を確定するためである。本当の狙いもまた紛れのないものであり、すべてのユダヤ人をスロバキアの強制収容所や労働収容所に強制収容した上で、順次絶滅させることであった。

内務省大臣官房から同省第14局に親展で宛てた書簡には、次のようにある。

共和国大統領との面談により、〔内務大臣は貴局に、〕ユダヤ人に対して厳格な措置を講ずるよう命令する。内務大臣は、すべてのユダヤ人を強制収容するためのユダヤ人収容所を新規に設置するよう命ずる。併せて、内務大臣はユダヤ人に対するいかなる旅行許可証の交付も禁止する。ただし移送の対象外とする措置は更新したり、取り消したりすることができる⁽¹⁰⁾。

1943年末には、基本的に言って既存の収容所の拡張が不可能であることはすでに明らかになっていた。特にセレヅとヴィーネの収容所の拡張はまったく不可能であった。ただし、ノヴァキーの収容所は、あと1000人

(8) NA SR, Národný súd, Tn ľud, 17/49, Gejza Fritz, Mikrofilm 912.

(9) NA SR, Národný súd, Tn ľud, 17/46, Anton Vašek, Mikrofilm 1010.

(10) Riešenie, III, S. 52. Siche auch NA SR, Národný súd, Tn ľud, 17/46, Anton Vašek, Mikrofilm 1010.

の収容が可能であった⁽¹¹⁾。それだけ収容枠があるということは、それに見合うだけの仕事の機会があるということであった。ここで全体を概観するために、1944年12月15日現在、セレッジ労働収容所には1130人の収容者が、ヴィーネには360人、またノヴァキーには1634人の収容者がいたことを述べておかねばなるまい⁽¹²⁾。ユダヤ人労働収容所の収容数は着実に増加した。上記3ヶ所の労働収容所に加えて、1944年春にはクルピナ [バンスカ・ピストリツァの南約50^{km}] に収容所が作られた。しかし、これは数ヶ月で本来の目的を終え、ウクライナ出身の収容者のための収容所になった。

スロバキア赤十字社もユダヤ人の運命に関心を持つようになった。それは、ユダヤ人が経済界から排除され、収容所に強制収容されたところのことである。スロバキア赤十字社の代表ドクター・フェドル・スコトニツキー (MUDr. Fedor Skotnický) は、すでに第一波の強制収容のときに [内務省] 第14局と接触し、収容所の生活環境を調査するために特別委員会の設置を要求した。その結果、ほとんどの収容者は、重労働に対する苦情だけでなく、決して良いとは言えない生活条件に対しても苦情を訴えていないことが判明した。何はともあれ、ポーランドにある死の収容所への移送よりも、彼らが望んだのは労働収容所に収容されることであったからである⁽¹³⁾。

準備の進み具合から見ると、強制移送が再開される危険性は本当に現実のものになるように思われ、政府からの最終的なゴー・サインを待っているだけであった。特に、[首相

の] ヴォイテフ・トゥカ (Vojtech Tuka) を冠に戴く政府急進派は、ドイツ側の協力で強制移送を再開しようとし、そのための方法と手段を模索していた。トゥカも「ユダヤ人問題の最終解決」を一心不乱に推進しようとしていた。プラチスラバ駐在特使モンシニョール・ブルツィオ師 [ローマ教皇代理大使] を通してバチカンが介入して、強制移送計画に対する憤りを表明したのにたいして、トゥカはそれを無視した。モンシニョール・ブルツィオ師は1943年4月7日にトゥカを訪ね、教皇聖座からの覚書を手交して、ユダヤ人の強制移送を中止するよう申し入れた。トゥカは、「危険なユダヤ人分子はウクライナに行くだろうが、国内の収容所に収容される者もいる。」という理由で、この覚書の受取を拒否した⁽¹⁴⁾。客観性を担保するために、トゥカの閣内では反対の声があったことは言っておかなければならない。1943年夏、トゥカは内務省第14局に対して、ユダヤ人5000人をすぐにも「東方の新しい居場所」に送り出すよう命令を出した。しかし、他の閣僚からは賛成を得られなかった。そこで、トゥカはドイツ側に賛同を求め、移送されるユダヤ人の生活環境を視察することにした。強制収容所に収容されたユダヤ人を視察することはできないかという問合わせに対して、ドイツ大使館は問題なしと回答した。視察がユダヤ人の国外追放をめぐる交渉を成功させるための決定的な条件であるを見ていたからである。スロバキア側が否定的な回答を受け取って、「ユダヤ人の新しい居場所」の視察を許可されなかったとすれば、内務大臣のマッハが、閣内で、東方へのユダヤ人の強制移送について強烈で手強い反対意見と一戦に及ばざるを得ないだろうとドイツ側は考えて、視察を許

(11) „Brief des A. Vašek an den Minister A. Mach vom 8. Januar 1944“, in: *Riešenie*, III, S. 54. a.a.O., S. 54.

(12) ユダヤ人労働収容所の収容者の状況調べによる。

(13) 著者によるドクター・フェドル・スコトニツキーへの聞き取り (1995年11月24日実施)。

(14) *Vatikán a Slovenská republika (1939–1945)*, (Der Vatikan und die Slowakische Republik (1939–1945)) Dokumente, Bratislava 1992, S. 135.

可したのである⁽¹⁵⁾。ところが、辻褄^{つじつま}が合わないように思われるかもしれないが、ドイツ側がスロバキア当局に提示した視察先はレジエンシュタットのユダヤ人ゲットーであって、そこにはスロバキア・ユダヤ人は一人もいなかった。

ドイツが対外的に表明したのは、『最終解決』に関するスロバキアのやり方に口を挟む気はない、スロバキア側の判断で決めるのがよい。』ということであった。そうは言いつつも、ドイツ側は強制移送を再開させようとして〔スロバキア側に〕圧力をかけた。そのことを示す最有力の証拠は、1943年12月22日に行われた〔大統領〕ヨゼフ・ティソとドイツ全権大使兼ハンガリー駐在ドイツ特使エドムント・フェーゼンマイヤー (Edmund Veesenmayer) との交渉である。その目的はスロバキア・ユダヤ人の強制収容所への移送を完了させることであった。フェーゼンマイヤーはベルリンに報告書を送り、この交渉の結果を次のように述べた。第一波の強制移送が終わった後になお、スロバキアに残っているユダヤ人は、今後数ヶ月中に強制収容所に収容されること。この作戦全体については、大統領ティソとブラチスラバ駐在ドイツ公使ルディンとの間で、さらに詳細かつ直接議論されるべきこと。また、面談に際してティソは、はっきりした期日を確約できる状態ではなかったが、フェーゼンマイヤーの提案は、この作戦を遅くとも1944年4月1日までに完了させるというものであった。ティソは、この期限を遵守すべく自分としても最大限の努力をすると約束した⁽¹⁶⁾。

(15) *Slovenské národné povstanie. Nemci a Slovensko 1944*, (Der slowakische Nationalaufstand. Die Deutschen und die Slowakei. 1944.) Dokumente. Bratislava 1971. Dok. Nr. 15, S. 53.

(16) Raul Hilberg, *Die Vernichtung*, Bd. 2, S. 790. (訳書『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』下巻, 49頁。)

この合意は、首相トゥカも同意していたが、あくまでも口約束でしかなかった。しかし、ドイツ側からの圧力はもはや論を待つべくもなかった。スロバキア政府は全面的に屈したわけではなかったが、強制移送を承認し、「ユダヤ人問題の最終解決」の実行原則と組織的対策の仕上げに携わることになった。だが、国際情勢（特に前線の状況）との絡み^{から}で、スロバキア政府は当初計画を放棄することにした。1943年8月10日の閣議では、年内にはユダヤ人の〔集団的な〕強制移送はないが、「忌まわしいユダヤ人分子は〔個別に〕強制収容所に収容する」ことになった⁽¹⁷⁾。

こうして、1943年にはスロバキアの領土からのユダヤ人に対する第二波の強制移送は行われなくなった。しかし、1944年の春（特にハンガリーがドイツ軍に占領された1944年3月19日以降）には、再び強制移送が危惧されるようになった。スロバキアの南隣の国〔ハンガリー〕では、急進的なファシスト一派による政権奪取で政権が交代し、より厳しい反ユダヤ措置が執行されたからである。ハンガリー政府は、自国を「ユダヤ人のいない」^{ユードエンフライ}国にしようとした。その結果、スロバキア・ユダヤ人は、ナチスがハンガリーでしたのと同じような過激なやり方を自国でもすぐに採用するのではないかと恐れるようになった。このような心配は根拠のないものではない。

1944年3月21日の政府会議は、経済生活からのユダヤ人の排除とそれに続く労働収容所への強制収容についての計画的措置に関する内務省文書を承認した。それに続いて1944年5月31日には、残りのユダヤ人を特別な施設に強制収容させるという命令が発出された。ブラチスラバでは、当時のゲーリング通り（現在のジズカ〔ジジコヴァ〕通り）にもゲットーが設置されたほどであった。こ

(17) NA SR, Národný súd, Tn ľud, 17/75, Mikrofílm 912.

うして、ユダヤ人狩りの恐れはますます強まった。1944年4月末から、ハンガリー・ユダヤ人の移送列車がスロバキア共和国の領土を経由してポーランドの絶滅収容所に向かうようになると、不安はいっそう高まった。本国の外務省(ベルリン)とフェーゼンマイヤー(ブダペスト)は、「ユダヤ人問題の最終解決」のために、ハンガリーとスロバキアが歩調を合わせるよう要求した。だが、スロバキア政府の行動はドイツの思惑ほどには迅速ではなかった。そのために、ドイツ公使館は、当時ギリシアとハンガリーに赴任していたユダヤ人問題顧問官ディーター・ヴィスリチェニーをスロバキアに呼び戻し、内務大臣マッハと協力させて、ユダヤ人の追加移送について協議させるよう要求した。ドイツ側としては、いまだにアレクサンデル・マッハのことを頼りになる人物と見ていたのである。しかし、1944年7月30日にマッハは複数の記者に、「ユダヤ人が強制移送の理由となるような行動をしなかったり、そのような行動を他人に強要しないならば、ユダヤ人を再定住させることはない。」と話している⁽¹⁸⁾。失望を隠せなかったドイツ側では、マッハへの信頼も薄れていった。これに加えて、マッハは、ユダヤ人が労働収容所や収容センターに隔離されれば、社会にとって有用な仕事をするだろうとも言っている。8月18日にポイニツェ[バンスカ・ビストリツァの西約56^{km}]に招集されたフリンカ警固団の将校セミナーの参加者は、マッハの話聞いて大騒ぎになった。上に述べたマッハの発言を聞いて批判しただけでなく、マッハを日和見主義者だと詰問し、与えられた指令を最後までやり抜くことの何たるかを^{わきま}弁えていないと非難した。マッハは右顧左眡して、まるでユダ

ヤ人を腕^{かいな}に抱きかかえて守っているかのように見えたからである。「以前は、自分もスロバキアからユダヤ人を追放しようと計画したことがあったが、それには十分な法的根拠がない。」と発言するに至っては、マッハの評判は地に落ちてしまった⁽¹⁹⁾。

1944年秋になると、スロバキアも戦争の結末を直感するようになった。スロバキア・ナショナリズム政権とその国家機構は崩壊直前であった。武装蜂起に転じたパルチザン運動は、ますます強力になり、戦争は最終局面を迎えた。当てが外れたブラチスラバ駐在ドイツ公使ルディンは、スロバキア国民蜂起[1944年8月~10月]が勃発する直前の報告の中で次のように述べている。

ユダヤ人問題にたいする後ろ向きの姿勢は、最近の数ヶ月でますますはっきりしてきた。公式会談ではユダヤ人問題を解決するための基本的な準備はできていると重ねて強調していたにもかかわらず、スロバキア政府の構想はどれを見ても、ここ数ヶ月は不首尾に終わっている。⁽²⁰⁾

1944年9月5日、かねて予告されていたスロバキア政府で人事異動があった。ヴォイテフ・トゥカに代わって、法律家のシュテファン・ティソ(Štefan Tiso)⁽²¹⁾が首相[ス

(19) „Meldung des zentralen Gau-Sicherheitsdienstes in Wien“, in: *Slovenské národné povstanie*, Dok. Nr. 66, S. 154-156.

(20) L. Lipscher, *Die Juden*, S. 154.

(21) シュテファン・ティソは、まったく準備をしないで政界に入った。後に、新政府での活動を次のような言葉で特徴づけている。「私は政治家ではないし、政治について何も知らない。私は使命を帯び、その使命に従ったのである。良心の呵責を感じながら越えられない一線はどこにあるのだろうか。」Vgl. „Dennik Štefana Tisu“, („Das Tagebuch des Štefan Tiso“) in: *Historický časopis*, Bratislava, XVIII, 1970, Nr. 2, S. 275f.

(18) NA SR, Národný súd, Tn ľud, 6/46, Alexander Mach, STK-Berichte, in: Ivan Kamenc, *Po stopách tragédie*, S. 240.

ロバキア自治政府の最後の首相]に就任した。新首相は第三帝国への忠誠を鮮明にして、「ユダヤ人問題の解決」に邁進し、スロバキア駐在ドイツ治安警察司令官ヨゼフ・ヴィティスカ (Josef Witiska)^[訳注3]と会談を重ねて、反ユダヤ措置の執行に協力するよう要請した。そして、スロバキア国民蜂起を「ユダヤ・ボルシェビキ」の仕業と言い、反ユダヤ作戦を可及的速やかに実行に移し、拘留したユダヤ人をセレッジに再開した労働収容所に移送しようとした。それと同時に、スロバキア国民が武装勢力を一掃するならば、政治的、道徳的、生物学的に国を危険に晒すすべての敵は、政府を先頭に立てて片付けられるだろうと希望を述べていた。政府はユダヤ人問題の抜本的解決を図ろうとしたのである。

このころ、内務省第14局はもう廃止されていて、その業務は国防省（あるいはその下に置かれた保安局）が引き継いでいた。保安局長は、かつてのフリンカ警固団 [フリンカ・スロバキア人民党の準軍事組織] の幹部であり、スロバキア国家社会主義に強く傾倒してそれを支持するオトマル・クバラ (Otomar Kubala)^[訳注4]であった。彼の指揮の下で、ユダヤ人の強制登録が再開され、次いで強制収容も行われた。これを所管する国防大臣シュテファン・ハシュシク (Štefan Haššik) は、ブラチスラバに居住する全ユダヤ人の強制収容に関する通知の発出をブラチスラバ市公証人役場に委任した（そこの所長は、第一次強制収容のときに特に深く関与していたアントン・ヴァシェック [内務省元第14局長] で

ある⁽²²⁾）。実際に職責に基づいて通知を発出した名義人は国防大臣ハシュシクであった。治安上の理由からハシュシクは、国籍、職業のいかんにかかわらず、またドイツ当局もしくはスロバキア当局が発行した証明書を持っていようとなかろうと、年齢や性別に関係なく、1944年11月29日の早暁にユダヤ人はブラチスラバの旧市庁舎の内庭に集合するよう命じた。この命令は、混血ユダヤ人およびそれを親とする18歳以上の子にも及んだ。内庭に到着したユダヤ人は、セレッジの収容所に移送された。

9月初め以降、セレッジ周辺にはナチスの部隊が駐屯していた。この占領部隊の指揮によって再開されたセレッジの収容所は、絶滅収容所に移送される前のユダヤ人を強制収容する一時収容所 (Auffanglager) [経過収容所] としての役割を果たし続けることになった。[占領部隊の] 毎日の課業は、スロバキア国民蜂起の勃発後に収容所から逃亡し、潜伏していた者に対するユダヤ人狩りであった（ただし、パルチザンとなって山岳地帯で戦闘に参加していた者は除かれた）。新たな任務を帯びて収容所に配置された親衛隊員は33人である。ブラチスラバ生まれのドイツ人、フランツ・クノルマイヤー (Franz Knollmayer) とヨゼフ・ハッキー (Josef Hackey) が収容所の責任者となり、1944年9月末までその任にあった。彼らの天下となった収容所では集団拷問が行われ、殺害されたユダヤ人もいる。しかし、収容所を出た移送列車は1本もない⁽²³⁾。

9月末、アイヒマン (Adolf Eichmann) の同僚であった親衛隊大尉アロイス・ブルンナー (Alois Brunner) がセレッジの収容所長

[訳注3] ヨゼフ・ヴィティスカ (Josef Witiska)。1944年、特別分遣隊H部隊 (Einsatzgruppe H) を司令官として率いて、スロバキア・ユダヤ人の強制移送に当たった。

[訳注4] オトマル・クバラ (Otomar Kubala)。フリンカ警固団の機関紙『Gardista (警固団)』の主筆。スロバキア国民蜂起後は、フリンカ警固団の実質的総司令官。

(22) NA SR, Národný súd, Tn ľud, 17/46, Anton Vašek, Mikrofilm 1010.

(23) Archiv Museum SNP. Banská Bystrica, Handbuch Nr. S 25/78. *Prehľad masových hrobov a vražd* (Übersicht über Massengräber und Morde), S. 48.

に任命された。ベルリンから赴任してきたブルンナーは、強制移送の再開という厳命を携えていた。移送再開を主張していた新任のベルリン駐在スロバキア公使ボーダン・ガルヴァーネク (Bohdan Galváněk) は、任地のベルリンからスロバキアのユダヤ人問題を抜本的に解決しなければならないと強く言ってきた。そのガルヴァーネクは、スロバキアに平和が訪れるのは、「人としての迷いを捨てて、すべてのユダヤ人を検束して移送するときだけである。」^(補注1)と述べた⁽²⁴⁾。完全移送を担保するためにスロバキア新政府はドイツの側に立ち、ユダヤ人問題に関しても断固たる立場をとるべきだというのが、彼の考えであった。

1944年秋にブルンナーがセレジに赴任したということは、詰まるところ様々な強制収容所への移送の再開を意味した。これによって頂点に達したのは、スロバキア政府とドイツ側との秘密交渉だけでない。この分野での急進的なフリンカ警固団の活動もそうであった。

1942年の強制移送をかろうじて免れたユダヤ人の多くは、ブラチスラバと西スロバキアに住んでいた。経済的に必要とされた人もいれば、セレジ収容所の脱走者で蜂起軍の支配地域に行くことができなかった人もいた。1944年9月28日から29日にかけての夜、ブラチスラバで最大規模の反ユダヤ作戦が実行された。ドイツ国防軍の兵士とフリンカ警固団の隊員 [フリンカ兵] 600人以上がユダヤ人居住区に侵入して、ユダヤ人1000人を逮

捕した。洗礼を受けたユダヤ人も逮捕され、逮捕者総数は1600人に上り、その日のうちに全員がセレジに移送された⁽²⁵⁾。

1944年10月4日、新首相シュテファン・ティソはドイツ公使ルディンと会談し、スロバキア政府はユダヤ人を敵視してはいるが、これ以上の強制移送は望まないとする立場を伝えた。フリンカ・スロバキア人民党は、ユダヤ人をスロバキアの収容所に強制収容し、そこで厳重に監視して国家経済が必要とする労働に当たらせようとしていた。しかし、この構想はドイツ側からの激しい反対に遭った。この会談のわずか数週間前には、シュテファン・ティソがスロバキアの領土からのユダヤ人の追放を承認していたからであった。ところが、その後、ティソは、強制移送によって外交が複雑化して深刻になりかねず、またバチカンやスイスから抗議が来る可能性がある懸念を口にした⁽²⁶⁾。これに対して、ルディンは、重ねて無条件で抜本的な「ユダヤ人問題の解決」を要請した。このとき、ルディンは強調して次のように述べた。

ここ(スロバキアの謂 — 引用者)で行われるユダヤ人排斥措置についての責任は、ドイツが引き受けるつもりだ。⁽²⁷⁾

ドイツはスロバキア政府に対してますます強く圧力を掛けはしたものの、次第にスロバキア政府が想像していたほど信頼できるパー

(補注1) この文意は、一般市民と当局が感情に囚われることなく、人の道を考えず、ユダヤ人を助けたいと思わないときには、はじめて強制移送の組織化が容易になるということである。当時、ユダヤ人が強制収容所で殺害されたことは周知の事実であったことに留意したい。

(24) *Slovenské národné povstanie*, Dok. Nr. 161, S. 311.

(25) R. Hilberg, *Die Vernichtung*, S. 792. (訳書『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』下巻, 50頁。) Vgl. *Slovenské národné povstanie*, Fernschreiben Nr. 522, S. 583.

(26) R. Hilberg, *Die Vernichtung*, S. 793 (訳書『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』下巻, 50頁)によれば、ティソはスイスのことを西側諸国と呼んでいた。Vgl. *Slovenské národné povstanie*, Dok. 169, S. 336.

(27) *Ebenda*.

トナーではないと気づくようになった。このために、ドイツはスロバキア政府を無視し、スロバキアからのユダヤ人の追放は、いっそのことスロバキア側の知らないところで組織化しようということになった。公文書館に保存されているスロバキアとドイツの会談記録から分かるが、大統領をはじめとする政府首脳は、ドイツを動かそうとしていたにもかかわらず、ユダヤ人に対する統制が自分たちの手から滑り落ちてしまったことを思い知らされた。1944年10月4日、まったく予期しなかったことだが、ヒムラーが突然ブラチスラバを訪問した。このとき、大統領と首相はヒムラーを前にして異議を唱えたが、ねじ伏せられた。ヒムラーは二人を面談に召喚して、それぞれに自説を述べた。その2日後になって、ようやく首相[シュテファン・ティソ]は日記に次のように書いた。

……我々は目を合わせて話したが、彼[ヒムラー]のほうが口数は多かった。彼は思い出したように、みなさんは1939年にはしたいと思うことは何でも我々と一緒に成し遂げることができたのに、今は我々に逆らっていると言った。初めは、私は説教をされているような気がした。ユダヤ人のせいで、兵士の裏切りのせいで、そして裏切り者への対応が甘かったせいだ。……45分の面談が済むと、雰囲気は一転した。ヒムラーの顔つきが変わっていたのだ。あんた、短気なんだよ！⁽²⁸⁾

ヒムラーと大統領ヨゼフ・ティソとの面談は、さらに緊迫した雰囲気の中で行われた。ヒムラーは、一方的に強制移送の無条件再開を要求した。スロバキア大統領は、混血ユダ

ヤ人と法の定める期日までに洗礼を受けたユダヤ人を強制移送の対象から除外するよう要求した。しかし、ヒムラーはそれには応ずることがなく、ユダヤ人は蜂起の片棒を担いで扇動したので、彼らを強制収容しなければ、住民が復讐されることになり、国の平和は脅かされかねないと訴え、「疎開[強制移送の謂]はユダヤ人のためである。」⁽²⁹⁾と述べた。

強制移送が再開されたのは1944年9月30日であり、その日にはセレッジから1860人がアウシュヴィッツに移送された。1944年10月3日から11月12日までの、それとは別の4本の移送列車を合わせれば、全部で7436人がアウシュヴィッツに移送された。1944年11月16日、そしてさらに12月2日(3日)には新たな移送列車で、ラーヴェンスブリュック、ベルゲン＝ベルゼン、ザクセンハウゼンの各収容所に移送された[表2]。

1944年にセレッジを出発した最後の移送列車は、テレジエンシュタット・ゲットーに向かい、416人を乗せて1944年12月23日に到着した[表3]。しかし、この移送列車の貨車の中には他の強制収容所に向かったものもある。この移送列車に乗っていた、当時13歳のフリードリフ・フェルドマル(Friedrich Feldmar)は、私の聞き取りに対して、この移送列車に乗っていたのは、1944年8月のスロバキア国民蜂起が勃発した後、セレッジの収容所から脱走し、その後身を潜めていたが、ほどなくまた捕らえられて、再開されたセレッジの収容所に移送された人たちだと言っている。一方、ドイツ軍は収容所を管理し移送の組織化に着手した。移送された者は、自分たちがどこに行くかを全く知らなかった。フェルドマルも、移送列車がジリナ経由でポーランドまで行ったのだが、そこでは受け入れられず、さらにテレジエンシュタットに

(28) *Dennik Štefana Tisu*, S. 273.

(29) *Slovenské národné povstanie*, Dok. Nr. 587, S. 1093 f.

表2 セレヅジからの強制移送 (1944 年秋~1945 年春) (人)

出所 A		出所 B	
		1944 年 9 月 30 日	1 860
1944 年 10 月 3 日	3 770	1944 年 10 月 3 日	1 836
1944 年 11 月 10 日	1 182	1944 年 11 月 10 日	1 890
1944 年 10 月 17 日	862	1944 年 10 月 7 日	920
1944 年 11 月 12 日	920	1944 年 11 月 2 日	930
1944 年 11 月 16 日	782	1944 年 11 月 16 日	785
1944 年 12 月 3 日	772	1944 年 12 月 2 日	742
1944 年 12 月 19 日	944	1944 年 12 月 19 日	944
1945 年 1 月 16 日	681	1945 年 1 月 16 日	681
1945 年 3 月 9 日	549	1945 年 3 月 9 日	548
1945 年 3 月 31 日	370	1945 年 3 月 31 日	370

出所 A：スロバキア国民蜂起博物館付属文書館（バンスカ・ビストリツア）所蔵 Handbuch Nr. S 25/78.

出所 B：ユダヤ博物館付属文書館（プラハ）所蔵，DP 14.

表3 セレヅジからテジエンシュタットへ移送された者の数⁽³⁰⁾

記号	到着日	収容者数	生存者
XXVI/1	1944 年 12 月 23 日	416	382
XXVI/2	1945 年 1 月 19 日	129	127
XXVI/3	1945 年 3 月 12 日	548	546
XXVI/4	1945 年 4 月 7 日	354	352
合計		1 447	1 407

向ったと述べている。このころ、アウシュヴィッツでは新規収容者の受入はなかったからである。

テレジエンシュタットで貨車から降りた収容者は、直ちに登録され、それまで携行していた貴重品はすべて取り上げられ、家族は一緒にバラックに収容された。健康な男女には仕事が与えられ、子どもは庭仕事を手伝った。小要塞^[訳注5]には収容されなかったの、比較的自由に生活していた⁽³¹⁾。

テレジエンシュタットでは 40 人が自然死したが、それを除いて全員が生きて解放された [表 3]。残念ながら、テレジエンシュタットでのスロバキア人収容者の状況をより詳しく伝える情報が記載された文書は残っていない。1945 年 4 月 7 日にテレジエンシュタットに到着した最後の移送列車（疎開列車）に乗車していたセレヅジの収容所長は、収容所の文書類を携行していた。その中には、セレヅジからの移送列車の編成を詳細に記録した文書があったが、テレジエンシュタット

[訳注 5] テレジエンシュタットの小要塞 (kleine Festung) にはゲシュタポの刑務所があった。過酷な環境であったと言われている。ゲッターはエーガー川沿いの小要塞の対岸にあり、「大要塞 (große Festung)」と言われた。

(30) Karel Lagus a Josef Polák, *Město za mřížemi* (Die Stadt hinter den Gittern), Praha 1964, S. 342.

(31) 1995 年 2 月 27 日に筆者が実施したフリードリフ・フェルドマルへの聞き取りによる。

で焼却されてしまった。ドイツ軍は自分たちの足跡を隠すために、リストやその他の統計資料を火にくべて、将来、自分たちの罪が問われそうな文書を燃やしたのである。

スロバキアから到着した収容者の、ゲッターでの暮らしは他の収容者と変わることがなかった^(補注2)。彼らはゲッターの中に溶け込んだのである。ウィーン、ベルリン、オランダ、ハンガリーからの小編成の移送列車を除けば、占領国からの移送列車がテレジエンシュタットに到着することはなかったが、他の収容者とは違って、スロバキアからの収容者は、アウシュヴィッツで実際に何が起きているのかを相当詳しく知っていた。アウシュヴィッツから二人の収容者(スロバキア・ユダヤ人のアルフレッド・ヴェツラー(Alfred Wetzler)とルドルフ・ヴルバ(Rudolf Vrba))が脱走した後は、ごくわずかの収容者だけしかアウシュヴィッツから脱走できなかったが、二人がもたらしたガス殺についてのニュースはスロバキアでは広まっていたからである^[訳注6]。テレジエンシュタット・ゲッターにいた古株の収容者は、この話を信じなかった。

それどころか、移送された者の幾人かがしばしば手紙を書いてよこしたことから、その手紙はアウシュヴィッツの収容者がまだ生存していることの^{まき}紛れもない証拠だと言い張ったのであった⁽³²⁾。テレジエンシュタット・ゲッターとか、その他の収容所で解放を経験した収容者がみずから口にした情報は、特に貴重である。たとえば、移送列車の行き先に関しては、奇妙なことに、元収容者の発言が公式情報と異なることは珍しくない。様々な記録では、1944年12月14日にテレジエンシュタット行きの移送列車がセレジを出発し、実際にテレジエンシュタットに到着したことになる。このことに疑いの余地はない。しかし、この移送列車に乗ったある女性の証言によれば、全員の最終目的地がテレジエンシュタットではなく、一部の女性や子どもはラーヴェンスブリュックに行ったとのことである⁽³³⁾。同じ日に仕立てられた移送列車の目的地が変更されて、ラーヴェンスブリュックに行き、短時間そこに停車し、再び別の場所に向かったという証言もある⁽³⁴⁾。

(補注2) ゲッターに到着したスロバキア人の収容者は、組織化、蜂起、抵抗などの活動をすることなく、割り当てられた仕事をして、自分たちがどうなるかの決定を素直に待っていた。当時、ユダヤ人の大量虐殺に関するニュースは、世間に浸透していた。スロバキア・ユダヤ人が殺害の情報を入手していたことは重要な意味を持つと私は考えている。

[訳注6] 『アウシュヴィッツ・レポート』の邦訳は以下を参照。木村和範(訳)「アウシュヴィッツにかんする3つの供述書」『経済論集』(北海学園大学), 第70巻第1号, 2022年6月。ヴェツラーとヴルバの脱走譚については以下を参照。Ivan Kamenec, “The Escape of Rudolf Vrba and Alfréd Wetzler from Auschwitz and the Fate of Their Report,” in: Ján Hlavinka, Hana Kubátová, and Fedor Blaščák, (eds.), *Uncovering the Shoah: resistance of Jews and their efforts to inform the world on genocide*, Bratislava: HÚ SAV, 2016, pp. 101-112. (カメネツ

「ルドルフ・ヴルバとアルフレッド・ヴェツラーのアウシュヴィッツからの脱走とその報告文書の運命」(木村和範訳)『経済論集』(北海学園大学), 第70巻第2号, 2022年9月。)上記の二人に続いてアウシュヴィッツを脱走したロジンとモルドヴィッツについては以下を参照。Eduard Nižňanský, “The history of the escape of Arnošt Rosin and Czesław Mordowicz from the Auschwitz-Birkenau concentration camp to Slovakia in 1944,” in: Ján Hlavinka, Hana Kubátová, and Fedor Blaščák (eds.), *Uncovering the Shoah*, HÚ SAV, 2016, pp. 113-134. (ニジニャンスキー「1944年にアウシュヴィッツ=ビルケナウ強制収容所からスロバキアへ脱走したアルノシュト・ロジンとチェスワフ・モルドヴィッツの歴史」(木村和範訳)『経済論集』(北海学園大学), 第70巻第2号, 2022年9月。)

(32) *Ebenda*, S. 254.

(33) 移送列車に乗車したオルガ・パノヴォヴァ(Olga Panovová)への筆者による聞き取り(1995年11月6日実施)。

1本ずつの移送列車だけでなく、全体としての移送列車の本数に関しても、移送された者の人数についての情報源が異なっていることは理解できる。目的地に関する情報についても同様である。移送は現場の判断で行われ、あらかじめ準備された措置どおりにはゆかなかった。[1944年の強制移送については]ドイツ当局もスロバキア当局も、第一波のときと同じように、誰が乗車したかについての正確な記録を残していない。

スロバキアからの強制移送の対象がユダヤ人市民だけではなくたことは、ここで指摘しておかなければならない。スロバキアの治安警察署長兼保安局長が作成した逮捕者に関する概要報告書によると、1944年12月9日までの逮捕者は1万8867人で、その内訳はユダヤ人9653人、「盗賊」3409人、脱走兵2136人、公務執行妨害714人、ジプシー172人、その他546人である。また、「特別措置」^[訳注7]は2237人であった⁽³⁵⁾。ヨセフ・ヴィティスカがこの報告書を書いたのは12月の初めて、スロバキアからの強制移送がま

だ終わっていない時期だったので、もちろん逮捕された者に関するこの情報は完全ではない。ユダヤ人総数8957人と「その他」のカテゴリーの者530人がドイツの強制収容所に移送されたという情報もあるが、それは現実の数字とは一致しない⁽³⁶⁾。

すでに述べたように、スロバキアの1447人がテレジエンシュタット・ゲットーに移送された[表3]。残念ながら、完全な名簿は保存されていない。戦争末期に強制移送を担当した組織は混乱状態にあり、その結果、文書には明らかに欠陥があった。

今後に残された研究課題は、セレッジの収容所を出たスロバキア・ユダヤ人がテレジエンシュタットに到着するまでの移送を追跡し、事実を収集して繋ぎ合わせ、それを年代順に整理するほか、生存者の運命に注意を払い、強制収容所から生還してから50年が経過してもなお、過去について証言する意思と能力がある人々に目を向けることであろう。生還者の数は年々、減少の一途を辿っているのだから。

(34) Vlasta Kládiová, „Osudy židovských transportov zo Slovenska v Osvienčime“, („Das Schicksal der jüdischen Transporte aus der Slowakei in Auschwitz“,) in: *Tragédia slovenských židov*, (Die Tragödie der slowakischen Juden,) Banská Bystrica 1992, s. 160.

[訳注7]「特別措置 (Sonderbehandlung)」は処刑の言い換えである。ユダヤ人の絶滅を意味する「ユダヤ人問題の最終解決 (Endlösung)」, 死が待っている強制収容所への移送を意味する「疎開 (Evakuation)」などの言い換えはナチス独特の用語法である (脚注29を付した本文参照)。

(35) Vgl. „Súhrnná správa o doterajších výsledkoch zatýkania a kontroly osôb nemeckými bezpečnostnými orgánmi na území Slovenska“, („Zusammenfassender Bericht über die bisherigen Ergebnisse der Festnahme und Kontrolle der Personen durch die deutschen Sicherheitsorgane auf dem Gebiet der Slowakei“,) in: *Slovenské národné povstanie*, Dok. 266, S. 457.

(36) *Ebenda*. 移送された者の情報は多様である。

Vgl. Livia Rothkirchen, *The Destruction of Slovak Jewry. A Documentary History*, Jerusalem s. XLVII; I. Kamenec, *Po stopách tragédie*, S. 271; L. Lipscher, *Die Juden*, S. 179, R. Hilberg, *Die Vernichtung*, S. 793; R. Hilberg, *Die Vernichtung*, S. 793 (訳書『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』下巻, 50頁) [「1万3000～1万4000人のユダヤ人が検挙された。このうち7936人がアウシュヴィッツに送られ、4370人がザクセンハウゼンとテレジエンシュタットの『老人ゲットー』へ送られ、その他のものはスロヴァキアで射殺された。数千のユダヤ人は隠れることができた。』(同上訳書, ただし漢数字を算用数字にした。)]; Eva Hartmannová-Schmidtová, „Ztráty československého židovského obyvatelstva 1938–1945“, („Verluste der tschechoslowakischen jüdischen Bevölkerung 1938–1945“,) in: *Osud Židů v Protektorátu 1938–1945*, Praha 1991, S. 101.